異文化理解と災害
社会学

インドネシアのスマトラ半島の北端にアチェという地域がある。今からちょうど 20 年前、アチェは巨大な地震・津波に襲われた。地震の規模は東日本大震災とほぼ同じであるが被害ははるかに大きく、20 万人もの人が津波で命を失った。日本人の目からみると、途上国の災害に対する脆弱さは目に余るものがある。

しかし震災後の人々の対応に目をやるなら、また違った図柄がみえてくる。アチェの人々は一定の避難生活を経た後、また海辺のもと住んでいた場所に戻ってしまった。そこで家を建て、コミュニティを再建した。さらに、失った生命をとり戻すべく被災者は活発に再婚、出産し、被災地ではベビーブームが起こった。現在、アチェの人口は震災前の水準に回復し、また全体として若返った。震災後も防潮堤はないままであるが、夕方になると海岸は夕涼みに来た人たちでごった返し、賑わっている。

片や日本の東北に目をやると、人々は高台に移転し、沿岸部に人はいなくなった。海岸には巨大な防潮堤がそびえたっている。徹底した津波対策の一方で、活気はない。震災後、多くの若い人たちは都市に移り、残っているのは年寄りばかりである。不便な高台移転地に今後も人が住み続ける見通しは不透明といわざるをえない。

災害というととかく被害にばかりに目を奪われ、一時的な支援や防災ばかりが論じられがちだ。しかし、少し距離を置くなら、災害は私たちの暮らしの成り立ちを映し出すレンズのような役割を果たすことに気づかされる。災害に着目することで思わぬ異文化理解、さらには「持続可能性」とは何かを探るヒントが得られるかもしれない。

室井研二　准教授

海辺に集う人々（Meulaboh, Aceh Barat, 2017 年）

あなたの言語学
言語学

私は言語学分野・専門に所属する学部４年で、卒論以外の必要な学修を既に完了しています。大学では実に様々なバックグラウンドを持つ先生、学友、先輩と出会ってきました。皆がそれぞれの興味関心を追究し、それぞれの目的地を目指していると感じられます。皆がそれぞれの「言語学」を持っている、と言えるでしょう。その中で私にとっての「言語学」は、「分析・体系の目を得る」ようなものだったと感じています。

私は幼い頃から全く知らない言語の音声を聞いたり、文章を見たりするのを好んでいました。文化か、あるいは文明か何かの深い部分に接しているようで、未知の世界を覗いているような気分でした。中学生、高校生のときにはアラビア語とヒエログリフを独学しました。これらの学びの楽しみ方は、難しいことを考えずに美術作品や音楽を鑑賞するようなものだったと思います。得たものは断片的な知識の集積に過ぎなかったかもしれません。

それから名大文学部に入り言語学の道に進みました。そこで、様々な角度から見た人間の言語そのものの様相を学びました。言語音、単語の構造、文の構造、意味などの観点から、言語そのものについて探っていく、という学びです。この学びによって、バラバラだった私の知識は体系的な知識に変わっていきました。今ではどんな言語に出会ったとしても、その言語で起こること、あるいはその言語そのものについて分析的に、体系的に説明する試みができるように思います。アートのたとえでいうと、美術史を学ぶと美術作品を、音楽理論を学ぶと音楽を、より深く鑑賞できるようになるのと似ていると思います。

ここまで述べてきたことは言語に対する私個人の向き合い方です。言語学でどんな問いを立てるか、それにどうアプローチするかは人それぞれで、問いに明確な答えがあるわけでもありません。あなたの「言語学」を探しに行きませんか。

市川瑛也　学士課程４年

言語学の研究室（リテラボ）

破戒印哲生かく語る
インド哲学

―― 哲学が何か役に立つのか。

哲学を学んでいると、時折そう問われることがあります。人によって様々に返答があるのでしょうが、一つには私は「人生の道標となること」を挙げます。

「道標」とは言っても、何もそう高尚な話ではありません。というのも、往々にして先哲の教えを完全に実践するなど容易ではないからです。例えばストア派の厳格な禁欲主義、カントの徹底した「人格」の尊重など、古今東西の哲学において「正しい生」というものが論じられていますが、多くそれらを忠実に守ろうとすれば大きな困難が伴います。インド哲学の例を一つ取ってもお釈迦様は五戒で殺生、嘘、不貞、盗み、飲酒といったことを戒めていますが …… 平素を鑑みれば少なくとも私はとんだ破戒者と言えるでしょう。今の時期耳元を飛ぶ蚊がいれば慈悲の心なくそれを潰し、喜々として酒類を注いでそれを家族と飲んでいます。そしてまたこの研究室でもしばしば宴会が行われているほどです。

しかしこうしたことを踏まえてなお、私は哲学の意義として道標たることを挙げます。必ずしも厳格でなくとも良いでしょう。先哲の思想や言葉に触れる中で、部分的にであれそれに共鳴し、また不完全であれ実践を試みようと思うことがやはりあります。インド哲学という一見馴染みのないものの中においてももちろんそうです。例えば仏教に見られる「慈悲」の概念は、他者への共感などに基づく様々な慈善の行為と通じています。大学生が学業に熱心に励もうとすれば、それぞれの身分に応じた為すべき本分 (これを印哲用語ではダルマと言ったりします) を果たすことになります。このように我々の人生に干渉し、その目標となって大小の変化をもたらしてくれること、これこそが哲学を学ぶ一つの意義ではないでしょうか。

山田侑汰　学士課程３年

左は約 1300 ページの分厚いサンスクリット辞書。ゼミの予習でお世話になる。右は名大農学部が作った日本酒、なごみ桜。白ワインにも似た味で美味しい。こうした酒類が予習の際の癒やしになることも …

月刊
名大文学部
第 140 号
隔月刊行

編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2024 年 7 月 10 日発行